

自己肯定感を高める指導法の研究

愛媛県立北条高等学校 吉田 亮太

1 はじめに

本校に本年度より赴任し、1年次生の担任をしている。本校は中予唯一の総合学科を設置する高校として、一人一人の個性を尊重した学校づくりを目指している。本年度の重点努力目標は、「Iの力を伸ばし、Weの世界を広げよう ―「人」を想い、自分を磨く―」である。「人」には、他者だけでなく、自分自身も含まれている。自分自身を大切に想う生徒を育てていくことが、本校教職員の願いである。年度当初に行った総合質問紙調査「アイチェック」（東京書籍）の1年次生の結果によると、自己肯定感に関する質問項目の中で、自分の性格や今までの経験に関する質問項目でポイントが高かった一方、授業での感動体験や、学校生活の中での他者からの評価に関する質問項目のポイントの低さが目立った。中学までの基礎的な学習の中でつまづきがあったり、集団の中で自分の良さを発揮できない状況が続いたりした生徒も多く、失敗体験の積み重ねから自己肯定感が低くなってしまっているように推測できる。このような状況に対し、日々の数学の学習活動を通して、生徒の自己肯定感を高めることができるのではないかと考え、この主題を設定した。

2 研究の目標

授業の改善、課題の改善、確認テストの実施、評価の改善など、習熟度別講座編成や少人数講座編成を生かした指導を行うことで、数学の学習活動を通して、生徒の自己肯定感を高めることを目指す。

3 研究方法および内容

(1) 授業に並行した課題の提示と確認をする。

授業で学習した内容を、教科書傍用教材を利用して課題を出し、次の授業の開始時に必ず確認する。確認の際は、努力を承認するとともに、できていない部分がある生徒にも、意識して肯定的な評価（例：半分くらいできているね）を与えるようにする。

(2) 授業で全員を指名する。

各授業で、生徒全員を最低1回は指名できるように、発問を工夫する。例えば、たすきがけを利用して因数分解をする授業では、①どういう方針

で因数分解をするか見通しを立てる（たすきがけを利用すると答えさせる）、②たすきがけの形をつくる、③与式の係数から下の数字を入れる、④積の値から左の数字を入れる、⑤積の値から真ん中の数字を入れる、⑥たすきに従って右の数字を入れる、⑦右上の数字の和が右下の数字と一致するか確認する、⑧たすきがけの結果から因数分解した形を答えるという流れで、8人の生徒の発表で解答を導く。スモールステップにすることで、生徒全員で課題を解決していく。また、答えにつまる生徒がいた場合は、ヒントを提示するなど配慮し、「わかりません」で終わらせないようにする。自分の考えを言葉にするのが苦手な生徒に対しては、生徒の考えを繰り返したり、明確化したり、さらに質問をしたりするなどの対応をする。生徒の発言の裏にある生徒の思考を想像し、代弁することで、全体が考えを深めていけるような、生徒一人ひとりが際立つ授業となるようにする。苦手な発表をしてくれた生徒には、授業後に「頑張って意見を発表してくれて有難う」などの言葉を直接かけて労う。

(3) 話合いの時間を設定する。

授業内容の核心となる発問や、思考力が問われる発問においては、話合いの時間を設定し、意見交換の中で考えを深めさせる。自分の良さやクラスメートの良さに気付かせる学習活動とするとともに、クラスメートとの会話により、自己内対話を深化させる。また、数学が得意な生徒にとっては、頼られているという責任感にもつなげる。

(4) 訂正ノートに肯定的な振り返りをさせる。

訂正ノートの反省欄に、GOOD（良かったところ）、BAD（改善すべきところ）、NEXT（具体的にどう改善したいか、次の目標）に分けて振り返りを書かせる。特に、GOODとNEXTを大切にし、肯定的な振り返りをさせ、将来に向けて自分をよりよく生かしていく方法を考えさせる。次回のテストでは、前回のNEXTの記述に対する自己評価をGOOD、BAD、NEXTでまとめるようにさせることで、生徒がPDCAサイクルを回すことができるようにさせる。書き出すことで考えを整理させ、自分を客観視できる

ようにさせる。また、生徒が記述していることに対しては、努力した過程を承認するとともに、各自が設定した目標に対して肯定的な応援の言葉を記述する。

(5) 確認テストを実施する。

学習内容の定着を図るため、確認テストを行う。回収したテストは、思考の過程を大切に、途中まで合っている場合は「ここまでOK」の記述をし、返却したものに再度挑戦させる。全問正解になるまで繰り返して提出させ、一人でできたという達成感を感じさせる。一人で試行錯誤して成功する経験をさせ、前向きな気持ちで努力を継続できるようにさせる。

(6) その他

前任校で中学生の指導をした経験を生かして、授業の目標（例：たすきがけを利用して因数分解をすることができる）を授業の最初に板書して提示する。また、授業の最後に振り返りを行うことで、毎回の授業で何ができるようになったかを各自が確認できるようにする。

得意分野を持っている生徒（例：そろばんを習っていて暗算が得意な生徒）を、その内容の専門家に指定し、授業の中で生かす。逆に、苦手分野を克服した生徒（例：授業の発問でつまづいてしまったがその後できるようになった生徒）がいたときも、専門家に指定し、できるようになった成果をみんなから認められるようにする。

4 研究の成果と課題

(1) 基礎学力診断テストの結果を分析する。

本校では、基礎学力診断テスト（ベネッセ）を各学期初めに行っている。自己肯定感に関わるアンケート項目について、1年次生の1学期と2学期の結果を比較した。「あてはまる」、「わりとあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の5項目の回答のうち、「あてはまる」または「わりとあてはまる」を選択した生徒（括弧内はそのうち「あてはまる」を選択した生徒）の全体に占める割合の推移を以下に示す。

ア 自分の考えを人からけなされそうな気がする

31.0 (5.5) % → 16.7 (1.9) %

イ 本当の自分でないような感じがする

29.1 (9.1) % → 14.8 (3.7) %

ウ 何でも自分から進んでやろうとする

34.6 (7.3) % → 38.9 (9.3) %

エ 自信がないのであきらめてしまうことが多い

47.3 (18.2) % → 42.6 (5.6) %

オ 自分がみじめだと感じる人が多い

40.0 (10.9) % → 31.5 (5.6) %

これらの結果から、入学時と比較して、生徒の自己肯定感が高まりつつあることが伺える。これらの結果は、数学の学習活動で得られた成果とは断定できない。本校の教育活動全体においてもたらされたものである。しかし、実際に良好な結果が出ていることは肯定的に捉えたい。

(2) 生徒の授業評価アンケートの結果を分析する。

2学期末考査後生徒に授業評価アンケートを行い、指導に対する評価を分析した。取組がよかったかどうか問い、「そう思う」、「だいたいそう思う」、「あまり思わない」、「思わない」の4項目の回答のうち、「そう思う」または「だいたいそう思う」を選択した生徒（括弧内はそのうち「そう思う」を選択した生徒）の全体に占める割合を以下に示す。

ア 授業に並行した課題の提示と確認をする。

97.4 (76.9) %

イ 授業で全員を指名する。

94.9 (61.5) %

ウ 話合いの時間を設定する。

92.3 (79.5) %

エ 訂正ノートに肯定的な振り返りをさせる。

94.7 (68.4) %

オ 確認テストを実施する。

94.9 (69.2) %

これらの結果から、各取組に対する一定の評価は得られたと考える。しかし、「理解が追いついていないとき当てられるとつらい」「当たることがプレッシャーになっている」「コミュニケーションが苦手なので話合いの時間がつらい」「わからないから自分の力だけで確認テストを解くことはできない」といった、逆に生徒の自己肯定感を下げてしまっていることが分かる記述もあった。さらに、「1問に時間をかけすぎだと思う」「理解不足の人が当たると授業が止まってしまう」「演習する時間もとってほしい」という意見もあった。生徒の性格や学習内容への理解度によっては、行ってきた取組が逆効果になってしまっている場合があることや、習熟度の高い生徒にとっては、授業進度が遅かったり、演習の時間が不足してしまったりすることが課題であると言える。

これらの課題を意識しつつ、今後も少人数講座編成を生かし、生徒一人一人に寄り添い、生徒の自己肯定感を高める指導法を研究していきたい。